

# 気になるフィオーレ喜連川人 Vol. 15

## 学んだことはいつか 自分を守る知識になる

女性消防団活動風景



4丁目  
佐藤 小苗

市内でたった5人しかいない女性消防団員である佐藤小苗さんがさくら市にやってきたのは7年前。お世話になる地域の役に立ちたいと消防署に出向き「あの〜、消防団に入りたいんですけど…」と申し出ると、「女性で消防団なんて聞いたことがありません。」と言われ、その場は諦め帰った。その一年後、市の広報で「女性消防団誕生、団員募集」の記事を見つげすぐさま応募した。他のメンバーと宇都宮の消防署に研修に行き知識を身に着けた。そのとき一緒に来ていた他の市の女性消防団が地域の保育園で小さな子にもわかりやすく楽しく学べる防災教室を開いていると聞き、自分たちが今後活動していく上で『これしかない』と確信した。「小さい頃から防災に対しての知識を学んで意識づけをすることは本当に大事。それは消防団で東北にボランティアに行つてより強く感じました。中学生たちの、津波のときどうすればいいか避難訓練で知っていたから逃げられた

という話を聞いたのもそう。だから、そのとき訪れた保育園の跡地で汚れた帽子や小さな靴を見て逃げ遅れたと察し涙が止まらなくなりました。「ところで、なぜ消防団なのか？実は小苗さんは火の怖さを身をもって体験している。4歳の頃、たき火の最中に履いていたお気に入りのズボンに火が燃え移り、足に大火傷を負った。「本当に一瞬で、火がパーンと飛んできてポツ！と勢いよく燃え上がって…。」語るその語気からも当時の恐怖が伝わった。放つておけば皮膚がん、最悪の場合足を切らなければならぬ。大火傷で手術後も傷跡は残り、以来スカートは履いていない。「小学校のプールの時間で、水着になる度にお友達から『小苗ちゃんの足の皮膚って気持ち悪いね。』と言われました。」今でこそ笑顔で振り返るが、その経験から学んだのは火の怖さを知ること。恐怖もその後の悲しみも体験したからこそ人に伝えられると感じた。「自分

の体験が地域の人や、特に子どもたちに還元できるのは消防団しかない。学んだことはいつか自分を守る知識になる。知ること、救われる命もある。そう思つて人前になる恥ずかしさを我慢しながら活動がんばっています(笑)終始明るい笑顔で語る。幼少の思い出が自身をふさぎ込ませてもおかしくないのに、その前向きな志はどこから来るのだろう。「傷ついたり、嫌な思いをしたときは必ず周りの人が優しく守ってくれた。家族だったり、友達だったり。その一つひとつで乗り越えられたから、いつも誰かにありがとつて気持ちを持ち続けています。感謝を受けたらまた違う誰かに返そう。そうやって自分に思いやりをかけてくれた人たちに恩返ししていきたい。」ありがとつ、を忘れず、感謝を受けたら誰かに返す。小苗さんのその心がけひとつで毎日は幸せになる。そしてそれがまた感謝の連鎖を生むのかもれない。

記事：大河原千晶

## モルタル造形でイタリア風のまちなみに



管理組合事務所が建つ、フィオーレ喜連川広場の角にあるゴミ捨て場の雰囲気がいま一新されようとしています。モルタル造形という景観工法を使って、本物そっくりのレンガ造り風ゴミステーションの制作が現在進行中です。モルタルとは、砂と水とセメントを混ぜたもので、統一感のある空間演出に効果的なため、テーマパークなどで多く使われています。今回の企画は、町の名であるフィオーレがイタリア語であることから、地域の至る所にイタリア風の景観をつくり、見て歩いて楽しめるまちをつくらうというもので、これが第1弾のモデルケースとなりました。これを手がけたはやき風株式会社は、さくら市内でこうした造形を広めることでまちの活性化を図っているようです。現在(3月19日時点)まだ制作途中で、今後レンガ色の赤茶色に塗られ、3月中での完成を目指します。

## その他にも、現在フィオーレでは景観づくりを意識した様々な取組みが企画／実行されています！

### まちなみコンクール受賞記念看板

団地の入口にあるフィオーレ喜連川の看板の横に設置。昨年、フィオーレ喜連川が第9回住まいのまちなみコンクールで「住まいのまちなみ賞」を栃木県で初めて受賞した事を記念し、その受賞賞金の一部で制作された。



### 草木のネームプレート

昨年12月、フィオーレ内の側道に立つ木々にネームプレートが「うじいえ自然に親しむ会」によりつけられた。今後も自然豊かなフィオーレを楽しめる景観づくりが期待される。



### 番地案内看板

近日設置予定。丁目と番地が表示されていて、フィオーレに遊びに来た人や、新しい住民にとってわかりやすく親切な看板。デザインも親しみやすい。



## 市の温泉ライダー撤退と今後の展開

さくら市は、2012年からさくら市で開催されてきたwizspo主催の温泉ライダーin SAKURAからの撤退を表明した。元々大震災復興推進基金の一部を利用して共催していたが、本年度で交付が終了のため主導的立場での関わりを諦めたようだ。公道を封鎖しての自転車レースは全国的に大変珍しいようで、本大会は県内外の自転車愛好家からの注目度も高く、イベントの継続を望む声は依然として多い。そのため、現在民間主導に切り替えて継続する方向で話が進められていて、市もできる限りサポートする意向のようだ。今後の展開に期待したい。

## NEWS

